くノ一あやめ
妻芝嘉和
表紙イラスト：つづきますみ
試し読み版
二次元ぷち文庫

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『くノーあやめ　前編』『くノーあやめ　後編』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

くノーあやめ
斐芝嘉和
表紙／つづきますみ
二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

あやめ

先代頭領の世話をしていたくノ一。正統な頭領の証となる秘伝書を預けられ、どこかに隠した。

桔梗（ききょう）

くノ一。先代頭領を毒殺、頭領の座を奪おうとする。

血のように紅い夕日を浴びた、高く険しい峠道――切り立った崖の傍に不穏な空気を纏って立つ、六つの影。

深い谷間を背にして追い詰められているのは、若い女だ。小麦色に日焼けした瑞々しい頬が、紅い陽射しを浴びて黄金色に輝いている。黒目がちの円らな瞳、キュッと引き結ばれた形よい唇、尖ってこそいないが細くあどけない顎筋――小柄で小顔、腰を屈めて油断なく身構えたその姿は、まるで栗鼠(りす)のようだ。緋色の袖なし短衣から伸びる腕はたおやかで、夕日に染まったしなやかな太腿も、短い裾に見え隠れしている小さな尻房も、羚羊(かもしか)のように引き締まっている。

短刀を構えた手には厳めしい手甲、赤ん坊の頭ほどもある石くれを踏みつけている脚には年季の入った脚絆――低く身構えた姿勢に油断や隙は微塵もなく、首のうしろでひとつに結わえた長い黒髪やふっくらと盛り上がっている短衣の胸元に気づかなければ、美しい顔立ちの少年だと見間違えるかもしれない。

一方、女を取り囲んだ者たちは――黒い。

目だけを出した覆面も、肘の辺りで袖を絞った上衣も、七分丈の筒袴も草鞋を履いた長足袋も――手に手に構えた一尺ほどの片刃直刀も、横から照りつける夕日を浴びてなお、闇で染めたように黒い。

墨流しと呼ばれる忍装束と、炭を擦り込んで艶消しした忍者刀。

たったひとりの若い女を取り囲んだい五つの影は、忍だ。覆面から覗く眼光は鋭く、
「考え直せ、あやめ。いますぐ戻れば赦してもよいと、桔梗様もおっしゃっておる」
発する声は殺気を含んで低く重い。
「アナタたちこそ、考え直して！　頭領様の死は里の一大事、若頭様にお伝えするのは当然のこと……なのにどうして、桔梗様は邪魔をなさるのか？　あの牝狐が、頭領様に毒を盛ったからよ！」
崖っ縁に追い詰められた女――あやめは、ジリジリ後退しつつ叫んだ。多勢に無勢、退路もない。まさに絶体絶命の窮地だが、蒼褪めた頬に諦めの色はない。
「馬鹿なことを言うな、あやめ。頭領様はすでに亡く、若頭様は戦奉公に出ておられて不在。となれば、くノ一衆の頭でもあり頭領の血筋にも連なっておられる桔梗様が、里を治めるのは道理であろう」
「道理なんかじゃない！　頭領様の死は里の一大事。なにはさておき若頭様にお伺いを立てるのが筋でしょう⁉」
「聞きわけのない娘だ……」
真ン中の男が顎をしゃくり、左右それぞれの端にいた男たちが前に出た。いつの間に収めたのか、その手に刀はなく――代わりに提げた鎖分銅を頭上に回し、ヒュンヒュンと風を切り始める。

それを見て、あやめの顔に不敵な笑みが浮かんだ。
「やはり、思った通りだわ。桔梗様は正統な跡取りではない。なぜなら、代々の頭領様が守ってきた秘伝書を手に入れていないからよ。もし頭領様が桔梗様を見込んでいたのなら、死を看取ってくれた桔梗様に秘伝書の在り処をお伝えしたはず。それをしなかったということは、頭領様は桔梗様を……」
すべてを言いきることは赦されず――。
ヒュンッ！　ヒュヒュンッ！
遠心力で加速した鎖分銅が、崖っ縁のあやめに左右から襲いかかった。
「フッ！」
はね上げた短刀で右の分銅を弾いたものの、その手首に、左から伸びてきた鎖が蛇のように絡みつく。
「く……ッ！」
強い力で引っ張られ、崖から引き離されそうになるあやめ。両脚を踏ん張ってなんとか抵抗しつつ、
「殺してはならない、生け捕りにしろ、と命令されたのね？　よく考えて、みんな。頭領様の死に水を取ったのに、桔梗様は秘伝書の在り処を教えてもらえなかったのよ。でも、私はすでに教えられていた……私が正しい判断をすると、頭領様が考えていた証よ！」

最後の説得を試みる。

いまは敵対しているとはいえ、同じ里の仲間だ。できれば傷つけたくない。しかしあやめの技量では、手加減したままこの場を切り抜けることは不可能。

「頭領様に見込まれた私が、若頭様にお伝えしなければならない、と判断したのよ。お願いだから私に任せて。これは里のためなのよ！」

山間の小さな里、危険な戦奉公をしてなんとか生き長らえている忍の血筋――そのすべてを、あやめはあやめなりに愛していた。助けあい補いあって生きていくのが里の忍だと思い、それを誇りとしてきた。

だからこそ、私利私欲のために先代を毒殺した桔梗は赦せない。毒殺した現場を見たわけではないし、どうしてそんなことをしたのかいまだに分からないのだが、しかし、現にいま里の掟を破っているのだから明らかに怪しい。

（私は分からなくても、若頭様ならなにか分かるかもしれない。だからこそ、早く若頭様にお伝えしなければいけないのに……！）

若頭に伝えて「問題なし」と判断されたら、あやめも桔梗に従うつもりだ。それが筋を通すと言うことだろう――しかし。

「なにを思い上がっておるのだ、あやめ。頭領様の付き人だったとはいえ、お前は里の生まれではない。どの血筋にも繋がらぬ余所者ではないか！」

追っ手の忍たちは、あやめの思いを理解しなかった。盲目的に桔梗に従っているらしく、全員が刀を収め、鎖分銅を振り回し始める。

「……もはや、これまで！」

小さく吐き捨て、あやめは意を決した。

――ヒュンッ！　ヒュヒュンッ！

手足に向けて分銅を投げつけられた瞬間、地を蹴って背後の谷間へ。

「ぬぉっ⁉」

小柄なあやめでも、すべての体重となれば重い。唯一かかっていた鎖を握っていた忍がこらえきれずに引っ張られ、あやめの後を追って崖から落ちる。

「拙い……ッ！」

まさかあやめが自死するとは考えていなかったのだろう。残された忍たちは大慌てで崖縁に駆け寄り、蒼褪めた顔で千尋の谷間を覗き込んだ。

その足元に――シュルルルル、と小さな音を立てて、砂埃が舞い上がった。

気づいたのはふたり、だが、飛び退けたのはひとり。

ビィンッ！　と弓の弦にも似た音を立て、細い縄がまっすぐに張る。足を引っかけられた三人の忍が、悲鳴を上げて崖下へ転落した。

崖っ縁に追い詰められたあやめが、気づかれぬように仕掛けていた罠だ。同時にそれは、

命綱でもあった。自らの身体を錘として、追っ手をまんまと嵌めたのだ。
「ぬぅぅ……やるではないか、あやめ」
残されたひとりは鎖分銅を捨て、再び抜いた忍者刀を油断なく構えた。低く腰を落とし、崖から少し離れて呼吸を整え――瞼を閉じて殺気を消す。
仲間たちの足を掬い、谷底へ突き落とした縄は、ミシ、ミシ、と左右に揺れている。だれかが縄を伝い、登ってきているのだ。
だれが？　あやめに決まっている。
縄は崖の縁に直接引っかかっているから、そのまま崖の上まで登ることは不可能。いつかは縄から手を放し、岩にしがみついて這い登らなければならない。
その間は、いかに手練れの忍とはいえ無防備になる。まして相手は、頭領の付き人として猫ッ可愛がりにされていた未熟なくノ一だ。崖の上に殺気がなければ、きっと油断してノコノコ這い上がってくるはず――。
――ミシ、ミシ、ミシ。
単調に軋んでいた縄が、不意に鳴きやんだ。
一拍置いて岩をヒタッと叩く音、荒い呼吸、岩に擦れる布地の音。
峠に吹く風が、わずかに不自然に揺らぎ――黒い影が、崖縁に飛び上がってきた。
その、瞬間。

「チェェイッ！」
裂帛の気合いを吐いて、ただひとり残されていた忍が刀を振る。
狙うは、膝。
片方の脚を切り落とせば、もし返り討ちにあってもあやめに逃げられる恐れは減る。
――しかし。
「ぬぐっ⁉」
振るった刀に手応えを感じたとき、頭上から降ってきたのは、太い男の声だった。
「むっ⁉　あ……ッ⁉」
仲間を斬ったのだと気づいて狼狽した忍の首に、鎖分銅がジャラリと巻きつく。そして凶悪な力で、忍を谷底へ引きずり込もうとする。
「ぬ、く……おぉ……ッ！」
刀を捨てた忍は四つん這いになり、石だらけの峠道に手足を踏ん張って耐えようとした。だが、絡みついた鎖に首を絞められる。息ができないから力も続かず、ズリ、ズリ、と崖っ縁へ引っ張られていく。
「頑張れ、踏ん張れッ！」
脚を断ち斬られた忍が加勢してくれたが、無理だ。その者自身もすっぱり斬られた膝から大量の血を流し、刻一刻と力を失いつつあるのだから。

忍の頭がとうとう崖っ縁に迫り出し、深い深い谷間を覗き込む姿勢に。首を絞められているせいで真っ赤に血走った瞳が、

「あ……あやめッ!?」

崖に貼りついて息を潜めていたくノ一に気づき、こぼれんばかりに見開かれる。

「ごめん、平助。こうするしかなかったのよ」

哀しげに目を伏せるあやめは、鎖を握ってはいなかった。

忍の首に絡みついた鎖分銅のもう一方の端にぶら下がっているのは――縄で一括りにされた、三人の忍。

谷へ落ちたと見せかけて崖に貼りついていたあやめは、目の前を落下していく忍たちに次々と縄をかけ、新たな錘としていたのだ。

「お、お前……そう、か、クチナワにも、術を……」

焦点を失った瞳で忍が苦笑し――とうとう力尽きて、ズルッと滑った。

瞼を閉じたあやめの傍を、悲鳴も上げずに落ちていく。

(平助、ごめん……アナタたちを誑かした桔梗様を、私は絶対に赦さないわ)

崖の上で呻いている最後のひとりが息絶えるのを待ちながら、あやめは静かに、決意を新たにした。

＊　＊　＊

里外れの地蔵堂に捨てられていた、親の分からぬ赤子――それがあやめだ。
先日急死した頭領は、あやめの育ての親でもある。
実の子を早くに失った頭領は親の顔を知らぬあやめを猫ッ可愛がりに可愛がり、手ずからさまざまな術を仕込んだ。だからあやめは、戦場に出たこともくノ一としての仕事もしたことはないが、その技は一流の忍と比してもけっして見劣りしない。
月の昇らぬ朔日の夜。
深い闇に乗じて山を降り、川縁の道を駆けていたあやめは、
(野にて小用あるときは、葦の茂みにて身を伏せせせらぎの音に紛れるべし――)
汀に広がる葦の茂みを見つけて耳の奥に懐かしい声を聞いた。頭の芯にソッと染み込んでくるような、低く落ち着いた頭領の声――同時に、下腹に刺すような痛み。
頭領の死を可能な限り早く若頭に伝えるため、自己暗示をかけて排泄や睡眠を制限していたのだが、そろそろ限界のようだ。気がつけば膀胱はずっしりと重く、一歩踏み出すたび下腹部に鈍痛が募る。
「これはいけない……」
墨を流したような闇の中で小さく呟いたあやめは、まだあどけなさが残る頬に淡い朱を登らせつつ、身を隠せるような影を探した。
川は土手の下を流れている。足場の悪い土手を下るときは、前後左右に注意して、でき

ることなら橋や大木の影に身を隠して、慎重に降りること――頭領に教わった知識を思い出しつつしばらく進んだあやめは、太い幹をくねらせた巨大な柳の木を見つけた。長く垂れた細い枝は、ちょうどよい具合に土手へ垂れている。

ユラユラ揺れる枝を潜り、その影を伝って土手を降りるあやめ。月明かりもない闇夜だからそこまでする必要はないのだが、

（追っ手がどこまで来ているか分からない……念には念を入れて、慎重に……）

周囲の気配に気を配りつつ、葦が茂った川縁まで降りる。

あまり早くない川の流れは、雪解け水のように冷たかった。水音を立てないように爪先を浸し、ソッと踏み込んで――眠っている水鳥たちを起こさぬよう、慎重に歩を進める。

踝まで洗われるようになったところで、あやめはようやく立ち止まった。せせらぎの音に耳を澄ませ、周りにヒトの気配がないことを確かめてから、足を肩幅に開き、やや腰を屈めて、短衣の裾を捲る。

現れたのは、しなやかな太腿はもちろん柔らかな下腹部まで小麦色に日焼けした、若い女の下半身。暗闇の中、わずかな星明かりを浴びた柔肌が瑞々しく輝く。

あやめの大切な場所を守っているのは、若衆が締めているような白い褌。幅広の前布はふっくらと盛り上がった肉畝をきつく締めつけ、捻って搾った後布は小振りな美尻の真ン中に潔く喰い込んでいる。

褌は用便のたびに解くのが本式だが、あやめはいま、急いでいた。中腰のまま秘裂を守る股布に指をかけ、横へとずらして、柔らかな肉畝を露わに。

月明かりがあれば、小麦色の身体の中、そこだけ生白い秘部が眩しく輝いて見えただろう。鋭角の逆三角形に日焼けし損ねた柔肌には、ようやく生え揃ったばかりの細くしなやかな和毛が一丁前に渦巻いているのだが、いまはそれも見えない。

「ふ……う……」

恥ずかしいその場所に微風を感じ、あやめの口から微かな声が漏れた。だれも見てはいない、見られてはいない――己の心に言い聞かせても、やはり恥ずかしいものは恥ずかしく、乙女の頬は燃えるように熱くなる。

こんなところでのんびりとはしていられない、早く済ませてしまおう――そう思ってはいるのだが、小水はすぐには出なかった。額に脂汗が滲むほど尿意は高まっているのに、下腹に力を加えてみても逆に弛めてみても、やはり出ない。排泄を制限する自己暗示が効き過ぎているらしい。

かといって、このまま走り出すわけにはいかない。一度気づいてしまった尿意はすでに限界まで膨れ、歩くことすらままならなくなっている。

（若頭様……）

赤銅色に日焼けした精悍な男の顔を思い出し、あやめは覚悟を決めた。

（このようなことに若頭様を使う非礼を、どうか、お赦しください……）

胸の内に呟きつつ、指を二本、唇に寄せ――舌を伸ばしてぴちゃ、ぺちょ、と舐める。

若頭・ヤスデの柾は、人望の厚い忍だ。太い眉に太い鼻、厳つい顎と分厚い胸――表向きは豪放磊落な野武士のようでありながら、その心遣いは細やかで忍としての能力も高い。里の娘の多くがそうであるように、あやめも若頭を密かに恋い慕っていた。

――じゅくん。

若頭の笑顔や声を思い出した途端、闇の中で秘裂がはしたない熱を帯びた。己の指を舐めているあやめの瞳も妖しく輝き、息がわずかに上擦ってくる。

いけないこと、恥ずかしいこと――だが、いまはしなければならない。

快感を覚えることで自己暗示を解き、小水を出すつもりなのだ。

（早く小用を済ませて、若頭様の元へ……）

その一心で人差し指と中指を唾液まみれにしたあやめは、闇の中に晒した秘部へソッと手を伸ばした。濡れていない親指で、股間を飾るしなやかな茂みに触れ――。

「ン……ふぅ……」

ヌルヌル滑る指先を、火照った割れ目に押しつける。

一番感じやすいのはほっそりとした莢からわずかに顔を覗かせた肉芽だが、すぐに触れたりはしない。濡れた指先で肉畝を掻き分け、恥ずかしい熱を帯びて生温かな粘液を滲ま

せたビラビラの縁を、ソッと、ソッと撫でる。
小水を溜めた膀胱が弾けそうになっているのか、秘裂に軽く触れただけで股間に電流が駆け巡った。中腰になった身体がこらえきれずに揺らぎ、川面に沈んだ脚がパチャッと小さな水音を立てる。
（いけない……）
闇を掻き乱すその音に、叱責されたような気がした。辺りにはせせらぎの音が満ちているから普通の者には聞き取れなかっただろうが、それでも――憧れの若頭に、修行が足りぬな、と笑われたような気がする。
己の未熟さを恥じると同時に、若頭を慕う気持ちがグゥッと膨れあがった。
指先を咥え込んだ淫唇が、燃えるように熱くなる。唾液よりもぬめるはしたない蜜が、じゅわ、じゅわ、と滲んでくる。
「ふぅぅ、はぁぁ……」
サラシを巻いた胸が、苦しい。
若頭を慕う気持ちが小振りな乳房にも溢れてきたようだ。
まだ浅い胸の谷間に甘酸っぱい香汗が滲む。乳首が硬く勃起して、きつく巻いた布地を突き上げて――胸先に焦れったさが募る。
同時に込み上げてくる、切ない気持ち。

「ふぅ、はぁ、ふぅぅ……柾、さまぁ……」
喘ぐ唇を突いて、想い人の名がこぼれ出た。
乳を求める仔猫のように、甘やかな鳴き声。
――ぞくん！
葦の茂みに隠れて屈めた背を、熱い波が駆け抜ける。
恥ずかしい、はしたない――しかし、愛おしい。
（柾様、柾様ぁ……私を、見て……お願い、見て……柾様を想うと、私、ほら……こんなに濡れて、しまう、の……）
胸の内に呟きつつ、温かな割れ目に差し込んだ細指を、ぬちゅ、ぴちょ、ねちゃ――紅い粘膜の間に細指を泳がせ、淫らな潤みを掻き回して小さな水音を立てる。弾ける快感が尿道を逆流し、小水を溜めた膀胱に熱く激しく響く。
――やめろ、あやめ。
耳の奥に若頭の声が聞こえた。
さざめいている川面に、若頭の苦笑した顔が浮き上がる。
――くノ一の身体は武器だ。想い人に捧げるとか、想い人と添い遂げるとか、そんなことを望んではならぬ。
（分かって、おります……でも、だから……せめて夢の中では……）

幻に話しかけつつ、あやめは淫唇をしごいた。
己の指を、若頭の指に置き換え、若頭の舌や唇だと想像する。
――仕方のないヤツだ。
苦笑を深めた若頭が、あやめの秘裂に顔を寄せた。
「う……ぁあっ⁉」
意外に柔らかな唇に、キュッと啄まれる淫核。
弾ける悦びにあやめが思わず声をこぼし、ビクビクッと震えると、唇はすぐに離れ、その代わりにぬめる舌がねちょっと貼りついてきた。
「く、うぅ……ッ！」
唇を噛んで溢れる声を殺し、唾液と淫蜜に濡れた指先で一番感じやすい肉豆をクニクニクニと捏ね回すあやめ。
次々と閃く快感に軽く曲げた膝が震え、中腰に屈めた腰が伸びそうになった。
膀胱の中では小水が湧き、尿意がどんどん膨れあがる。
――小便など、漏らすなよ。
想像の中の若頭は、いつも少し意地悪だ。あやめが恥ずかしいと思うことを平気で口にして、羞じらうあやめを笑い、照れるあやめをからかう。
（お漏らしでは、ありませ……ん……コレは、柾様に早く、会い、たくて……柾様のため

に、柾様を想えばこそ……うぅ、くぅぅ……！」
——俺のため？　俺に小便するところを見ろというのか？
（ち、ちが……そうじゃ、なくて……ンッ⁉　くぅ、うぅぅ……ッ！）
幻との問答をきっかけに、若頭の前で小便をする自分を想像してしまった。
なんと恥ずかしいのだろう、なんと浅ましいのだろう——。
だが、なぜか胸が高鳴る。
闇の中で顔が火照り——左手が股間へ伸びて、火照った肉畝に細指を添えた。軽く力を加え、ムニュッと割り開く。ハの字に開いた太腿のつけ根に、妖しく紅い肉華が艶やかに咲きこぼれる。
本当に見せたら、笑われる。
いや、きっと嫌われてしまう。
それは分かっているのに、見て欲しかった。
どうしてなのかは分からない。
ただ、恋しくて恋しくてたまらぬ若い牡に、自分のもっとも恥ずかしい姿をしっかり観てもらいたい——。
「くぅ……はぅっ！」
昂る気持ちを乗せた指先が、割れ目の縁に痼り勃った淫核をキュッキュッとしごく。

湧き上がる悦びの波が尿道から膀胱へ、膣孔から子宮へ――矢のように走り抜けて増幅し、恥骨から背筋を伝って脳天へ、津波のように押し寄せてくる。
息が上がり、心が乱れた。
来る――出る――小水が。
（で、出ます……出ますぅうっ！　見て、見て見て……若頭様ぁあっ！）
胸の内に響く己の声に、全身がカァッと熱くなった。
もう止まれない。もう戻れない。
閃く悦びを追いかけて淫核を責め立て、割れ目を押し開いた左手の指でぬめる淫唇をヌチュヌチュとしごき――。
――なにが出るのだ？　なにを見ろと？
幻のはずの若頭の声が、妙にはっきりと聞こえた。
見られている、ジッと見つめられている――。
思った瞬間、
「ふ……あ、あぅうっ!!」
悦びと羞じらいが爆発した。
理性が焼き切れ、頭の中が真っ白になり――ビクンッ！　ビククンッ！
弾けるように反り返るあやめ。

男根を求める膣がキュウッと緊縮、下腹に自然と力がこもり――ピュッ！
ピュルルッ！　プッシャァアアッ!!
溜まりに溜まった小水が、尿孔を震わせつつ勢いよく迸った。
「ふぁ、あ……あぁぁぁ……」
大粒の滴を煌めかせ、沛雨のように飛び散る小水。
最初の勢いが消えても夜闇に鮮やかな弧を描き、ぴゅぅぅ、ぴゅぅぅ、とわずかな飛沫を散らしつつ間歇泉のように幾度も噴く。
額に脂汗が浮くほど辛かった尿意が、ウソのように消えていく。
尿道を駆け抜けていく熱い小水に淫核の根元を責められているのも、我を忘れるほどに気持ちイイ。
（見て、いただけましたか、若頭様……あやめの、オシッコ……ほら、こんなにたくさん、出て……います……）
淫らな余韻に浸り、暗い川面に何気なく目を向けたあやめは――。
「――あっ!?」
ようやく異変に気づいて我に返った。
これほど勢いよく小水を出しているのに、水面を叩く音は聞こえず、代わりにシパタタタ……と、なにか硬いモノに浴びせている音。

よくよく見れば、水面だと思っていた闇が蹲った子供くらいの大きさに盛り上がっていた。闇に慣れた目が、奇妙に丸い胴や冷たい流れに沈めた手足、そしてあやめの小水をまともに浴びてニンマリ笑っている顔に気づく。

「な、何奴ッ⁉」

あまりのことに、赤面しているヒマもなかった。

褌を戻す間も惜しんでパッと飛び退く。

しかし――ビュチャッ！

一瞬遅く、無防備な股間に生温かな粘液を噴きかけられてしまった。

「くぅぅ……ッ！」

背筋がゾワッと粟立つほどの、生理的な嫌悪感。

ようやく小水が止まった股間を押さえ、腰を屈めたあやめが葦の茂みに沈み込むと、代わりに小柄な影がスッと立ち上がる。

子供のように小さな、そして奇妙に歪んだ影だ。

なにかに圧し潰されたように扁平な頭、左右に飛びだしたような大きな目玉、耳まで裂けていそうな大きな口――。

「貴様……カワズの仁平（にへい）ッ⁉」

「ケケッ！　御名答」

答える男に向け、クナイ――ひとつ刃の手裏剣を投げつけるあやめ。
狙いは確かだったのに、風を切った凶器は影の身体に刺さることなく、明後日の方向へ弾かれてしまった。
「おやぁ？　あやめ殿は我の術を知らぬのか？　ケケッ！」
「チィ……ッ！」
舌打ちしたあやめは、吹きかけられた粘液にぬめる股間に手早く褌を戻し、川縁に向かって駆ける。驚いた水鳥たちがけたたましい鳴き声を上げてバサバサと飛び立つが、構ってなどいられない。
カワズというふたつ名を持つ仁平は、水を用いた術に長けている。特に、異常に濃い汗や唾液を全身に纏うことであらゆる攻撃を逸らしてしまう「滑身の術」は、カワズと言う名にふさわしい不気味な忍法だ。
しかし、欠点がないわけではない。あまりにも濃い体液はすぐに乾いてしまうから、水辺以外では使えないのだ。だから――。
（とにかく、土手へ！）
仁平と戦うなら、真っ先に水辺から遠退かなければならない。
その判断は誤りではなかったが、しかし、甘かった。
「く……あぁっ⁉」

いきなりなにかに脚を取られ、葦の根元に転倒する。
——しゅる、しゅるるっ！
四方八方から、なにかの擦れる音が近づいてきた。頭の底を引っ掻かれているような、おぞましくて不気味な、耳障りな音。
「こ、これは……チィイッ！」
ぬかるみを蹴り、茂みから飛び上がるあやめ。
それを追って数本の細長い縄が、生きた蛇のようにくねりながら殺到する。
ツランッ！
腰のうしろに差した短刀を引き抜き、宙に浮いたまま一回転。手足に絡みかかっていた縄をすべて断ち切ったあと、再び葦の中へ身を伏せる。
「……クチナワの、重蔵(じゅうぞう)!? アナタまで桔梗の味方をするの!?」
武器としても道具としても使い道の多い縄は、欠かせぬ忍道具のひとつだが、それを生き物のように自在に扱えるのはクチナワの異名を持つ重蔵だけだ。頭領の甥でもあり、若頭の幼馴染みでもあり——捨て子だったあやめとよく遊んでくれた、歳の離れた兄のような存在でもある。
「済まねぇなあ、あやめ。けど、しょうがねぇんだ。俺はお前より桔梗とのつきあいのほうが長ぇし……それに、柾は恋敵だしな」

深い茂みのどこかから、自嘲気味の笑いを含んだ重蔵の声が聞こえてきた。
（拙い……）
あやめの頬に焦りが浮かぶ。
ふたりがかり、しかも相手は特殊な術を使う仁平と重蔵。水辺での仁平はほぼ無敵だし、視界の悪い茂みは重蔵の縄を隠しやすい。
（倒せるのは、重蔵だけ……）
逆手に握った短刀を握り直したあやめは、唇を噛んで覚悟を決めた。兄のように慕っていた重蔵だが、こうなれば討ち倒すしかない。
「こ、恋……がた、き？」
重蔵の話術に引き込まれたフリをして、あやめは耳を澄ました。
「知らねぇのか、あやめ？　柾の奴ぁ、桔梗に惚れてるんだ」
答える声は、茂みの中を少しずつ移動している。同時に縄も仕掛けているはずだ。
（土手へ向かわせないつもり……ね。なら、次はあの辺りへ向かうはず……）
重蔵から教わった「口縄の術」を思い出し、相手がなにを考えているか予測する。重蔵も仁平も手練れだが、あやめがどれほどの使い手か、まだ分かっていないはず――つけいる隙があるとすれば、そこだ。
「かくいう俺も、あの色っぽい流し目にぞっこんでよぉ」

「わ、若頭様が、桔梗様を……う、嘘だッ！　デタラメを言うなッ！」
激昂しているフリをして、あやめは土手までの距離を目測で測り直した。
同時に、密かに、懐から取り出した仕掛け縄を伸ばす。
「嘘ならどれほどよいことか。でもなあ、本当なんだよ、あやめ。しかも桔梗も、柾を憎くは思っていない。奴ぁ見た目もいいからなあ。醜い俺が桔梗の気を惹くためには、お前を捕らえて差し出すしかねぇんだよ」
――しゅるるっ！
「チィッ！」
足首を狙って飛んできた縄を、蜻蛉（とんぼ）を切って避けるあやめ。
宙に浮いている一瞬で、葦の根元に身を伏せた重蔵を見つけた。
着地と同時に身を捻り、クナイを擲（なげう）つが――。
「ケケッ！」
横から仁平が飛びだしてきて、ぬめる身体に弾かれてしまう。
だが、そこまでは計算の内。
「かかったな、あやめ！」
重蔵が叫んで躍り上がり、茂みの根元へ広げていた縄を一斉に動かした。
しゅるる――しゅばばっ！

葦の根元、水面を走る無数の縄が、蛇のようにくねりつつあやめに殺到。
――だが、ギチッと縛り上げられたのはヒトほどの大きさの流木だった。
「なにっ⁉」
クナイを叩きつけてから、ようやく空蝉の術だと気づく重蔵。
その、醜い瘤を浮かべた猫背にトトトッ！　と三本のクナイが突き立った。
「く……あっ⁉　い、いつの間に……⁉」
小さな凶器が飛んできた元へと目を向けた仁平と重蔵は、土手の上に生えた柳の巨木の傍にあやめを見つけ、瞠目した。わずか六間、忍が走ればすぐの距離ではあるが、しかし足音はしなかった――。
「アナタに教わった術よ、重蔵」
右手の指の間にクナイを現しつつ、辛そうに顔を歪めたあやめが言う。
「土手から降りるとき、この柳の根に、万が一のときに備えて縄を張っておいたの。それに新たな縄をかけ、駆ける代わりに引いて滑り――」
「……地擦り縄の術、か。俺の縄の音に紛れて葦の根元を滑ったんだな」
「そうよ。そのクナイには痺れ薬が塗ってある。申し訳ないけど、行かせてもらうわ」
身動きできなくなった重蔵とそれを介抱しようとしている仁平に見切りをつけ、踵を返そうとするあやめ。

だが、その細い身体に、背後から太い腕が巻きついた。
「きゃ……ッ⁉」
悲鳴を上げる間もあらばこそ、軽々と持ち上げられ――。
「グフ、グフフ……あやめはやはり、めんこいのう。ヌフッ！　いい匂いだ」
首筋にグリグリと、硬い頬や鼻を擦りつけられる。
「くぅっ⁉　い、岩男ッ⁉　あ、アナタ、いつから……⁉」
「ヌフ？　そりゃあ、あやめが土手を降りていく前からさぁ」
熊のように大柄な男は、岩男。そしてそのふたつ名は、ホトケ。
顔が大仏に似ていることからつけられた名だが、死体のように気配を消して岩や大木と同化する術が得意なことも異名の中に含まれている。
「ここいらで待ち構えていれば必ずお前が通るってよぉ、桔梗様が教えてくださっただ。そしたら、通るどころか小便まで始めてよぉ――なかなか面白かったぞぉ？」
「く、うぅうっ！」
恥ずかしい行いの一部始終を見られていたと知って、真っ赤になるあやめ。
だが、これだけ密着していれば手がないわけではない。腰のうしろに差した短刀を引き抜けば、岩男の脇腹に突き立てることができる――しかし。
「ふ……うぅっ⁉　あ……な、なに……⁉」

いままで意識の外にあった股間が、ゾクン、ゾクン、と疼き始めた。
仁平に浴びせられた気持ち悪い粘液に、なにか毒でも仕込まれていたのか。
「ケケッ！　桔梗様直々に調合してくださった毒が、ようやく効いてきたようだなあ。万が一に備えていたのはお前だけじゃねぇんだよ」
ぐったりした重蔵に肩を貸し、川縁から上がってきた仁平が、紅く染まったあやめの顔をいやらしく笑いながら覗き込んだ。
睨み返したいが、できない。
「ふぅ、はぁ……く、う、うぅぅッ！」
戦いの最中に慌てて戻した褌の下、秘裂が燃え出しそうなくらい熱い。小水を出すために弄っていた肉豆が弾けんばかりに痼（しこ）り勃（だ）ち、ズクン！　ズクン！　と拍動している。
「桔梗様が言うには、遅効性の淫毒だそうだ。万が一あやめに逃げられても、これさえ吹きかけておけばそのうちに動けなくなるってよ。ケケッ！　女ってのは怖ぇなあ」
笑う仁平の顔がぐにゃりと歪む。
なにか言い返したいのだが、ジュクジュク潤み始めた秘裂にすべての意識を持っていかれて、あやめは「はぁ、はぁ」と乱れた息しかこぼせない。
「グフ、グフ……な、なんか、いやらしい匂いがしてきたな。こ、ここで犯っちまってもいいのかな？　役得って奴だよなあ、仁平」

「焦るな、岩男。重蔵もこんなになっちまったし……それに、まずは桔梗様に御報告だ。ケケッ！　小便臭ぇあやめより、もっといい御褒美をもらえるかもしれないぜ」

大男の太い腕に身体を抱き締められたままなのに、男たちの不気味な笑い声はどんどん遠くなっていく。

（こんな卑劣な毒に、負けては、ダメ……若頭様に、お伝え、しな、けれ、ば……）

焦る気持ちすら狂おしいもどかしさに負けて――あやめの意識は千々に乱れ、荒い息をこぼしつつ獣のように呻くことしかできなくなってしまった。

――泥沼に溺れているような、息苦しさ。

身体が深く折り曲げられていて、いくら息を吸っても苦しさは消えない。

「ふ、くぅ……あっ⁉」

姿勢を正そうとしてもがいたあやめは、ようやく手足を縛られていることに気づく。

短衣から伸び出した小麦色の細腕は背のうしろへ捻られ、重ねた手首を荒縄できつく縛められていた。瑞々しい太腿は小さな膝小僧を外へ向け――脚絆をつけたままの脛を胡座の形に組まれ、首のうしろから垂れる丈夫な縄でまとめて縛り上げられている。

胡座を掻いた脚に胸を被せるような、苦しい姿勢。

身動きできない身体は横倒しになっていて、右肩や右頬は腐りかけの板床に擦れていた。

「秘伝書の在り処を教えなさい。中身までは訊かないわ。だから……」
「だ、だれが……うぅうっ！」
湧き上がる怒りを楔としてどうにか自制心を取り戻したが、尻穴を舐められていることに変わりはない。しかも、カワズというふたつ名を持つ忍の舌は、まるで舌らしくなかった。喩えるなら――そう、蜂蜜をたっぷりと絡めた人差し指。
羞じらう尻穴にぬめる弾力がペトッ！　ピタッ！　ネチョッ！　尖端が回るようにくねって、淫毒混じりの唾液を排泄孔全体に打ちつけてくる。
生温かな粘液がたっぷり染みつくと、今度はヒタッと押しつけられ、皺のひとつひとつに擦り込むように、クチュキチュニチュクチュ――。
「うぅ、くぅぅ……そぉおっ！　負けない、負けない……どんなこと、され、たって……ふ、うぅっ!?　く……ンぷ、うぅっ!?」
岩男の疣々男根の下で、あやめの頬がパァッと赤らむ。恥辱に歪んだ眉根が開き、淫毒を擦りつけられた唇がわずかに開いて、甘い吐息がこぼれ出しそうになる。
（そ……んなっ!?　お尻が、お尻が……お尻、なの、にぃっ！）
異様な舌先にしごかれ揉まれ、執拗に舐めまくられた菊膜が、甘く痺れて蕩け始めた。
汚い、イヤだ、気持ち悪い――年頃の乙女としては当然の感情が、じわじわ染み広がる肛悦に揺らぎ、薄れて、どこかへ押し流されていく。

気になるシーン 試し読み ここからスタート!

「ケケッ！　強情な女だ。本当に穿っちまうぞ？」
「うっ⁉　あ……くぅっ！」
ニュリッ！　ニュリリッ！
尻穴に触れていた舌の動きが、微妙に変化した。
菊膜の皺を伸ばすように円を描いていた尖端が、先を尖らせて穴の中央を突き、クニクニと躍り始めたのだ。
「まあ、なんと器用な……そのまま中まで入ってしまうのですか？」
無邪気にはしゃいだ桔梗が、逆さに仰向いたあやめの尻を覗き込んだ。
気をよくした仁平が鼻の下を伸ばし、
「ケケッ！　よく見ていてくださいよ……そらっ！」
グリリッ！
「ぁああ――ッ⁉」
拒む括約筋を押し退けて、強引に押し入ってくる熱いぬめり。
だが、痛くはなかった。
気持ち悪くもない。
肛膜に擦り込まれた淫毒のせいで、甘やかな痺れが湧き上がっただけ。
（ああダメ、弛む……お尻が、弛んじゃ、うぅうっ！）

羞じらうあやめを裏切って、仁平の器用な舌先に中央を穿たれた菊蕾がゆるりゆるりと解けた。淫らな反応を示す己の身体が恥ずかしい、感じてしまう自分が情けない――なのに、心地よい細波は直腸を伝い、逆さになった腹の奥まで温かくなってしまう。

「ケケケ、どうだ、ンン？　もっと奥まで舐めてやるぞ」

ぐにゅり、にゅり、ぐにゅにゅ――くねる舌先が排泄器官を掻き分け、奥へ奥へと潜り込んできた。ネバネバした長い舌が、腹の中に貼りつき、離れ、蛇のようにうねる。酒と唾液に溶けた淫毒を擦り込まれ、直腸粘膜が燃える。じゅわ、じゅわ、と腸液を滲ませて、やがて狂おしいもどかしさが膨れあがる。

ウズウズする、ムズムズする。

痒い、辛い、揉みたい、しごきたい――なにか硬いモノを、太くて長くてゴツゴツしたモノを、尻穴に突っ込んで欲しい。滅茶苦茶に掻き回して欲しい。

そう、顔の上で暴れているコレのような、疣々を生やした熱くて重い肉棒で――。

「く、ンぷ……うぅうっ！」

脳裏にフッと閃いた淫欲を、あやめは慌てて押し返した。

だが、もうダメだ。

一度火をつけられた牝の身体はたくましい男根を求めてはしたなく疼き、仰向いた膣孔がキュウッと窄む。蜜を滲ませたビラビラが割れ目の中で震え、仁平の長い舌に犯された

直腸までもが淫らに蠕動してしまう。
「ケケッ！　一丁前に搾ってきやがる。このガキぁ、チンポ欲しいってよ！」
笑った仁平が身を退いて――にゅぽっ！
間抜けな音を立てて、あやめの尻穴から舌が抜けた。
奥までしっかり舐め回され、即効性の淫毒を擦り込まれた肉穴は、締まることを忘れたかのようにポッカリと口を開く。腸液に濡れてヌメヌメとした、妖しく波打ち揺れ動く紅暗い排泄器官が、奥の奥まで丸見えだ。
（あ、ああ……そん、なぁ……ッ！）
弛んだ肛門から冷たい空気が流れ込み、腹の中をくすぐられた。
淫毒を擦り込まれた肉膜が焦れったくなり、仰向いた尻穴の奥からぬちょ、くちゅ、と擦れあう音が立ち上ってくる。
「ケケケ、なんていやらしいケツの穴だ。コイツ、ホントに生娘か？」
卑しく笑った仁平が、血走った目を桔梗に向けた。
ハッキリ言葉にしなくても、なにをしたいのかは顔に書いてある。
「犯したいのですか？　仕方ありませんねぇ」
艶やかに微笑んだ美女は小首を傾げ、ですが、ともったいつけて釘を刺した。
「私の目的は、あくまで秘伝書の在り処を訊き出すことです。あやめを悦ばすことではあ

りませんよ」
「わ、分かっていまさぁ……そら、あやめ！　いい加減歌え！　でねぇとテメェの小汚ぇケツの穴に、俺様のモノをぶち込むぞ!!」
着物の裾を捲り、褌の中から己のモノをいそいそ抓み出す仁平。
粘液に濡れてヌラヌラ光るソレは、犬の男根に似た不気味な物体だった。カリ首はハッキリとせず、尖端から根元まで亀頭のように紅い。仁平自身は子供のように小柄だが、その逸物は大人並みに太く、しかも異様に長い。
「どうだ、分かるかあやめ？　ンン？　これがお前のケツの穴に入るんだぞ」
「うぁっ!?　や、や……ぷふっ！」
逆さになった尻房に、ベチョッと打ち当てられた太いモノ。
その弾力、その熱さ、その太さ、その重さ――目を向けなくても分かる。
顔の上を蹂躙し、瞼や鼻や唇に生臭い疣々を擦りつけているコレの同類だ。
本能的な恐怖を感じ、喉の奥から悲鳴が込み上げてきた。
だが、叫べない。
叫ぶわけにはいかない。
（ま、負け……ない……負けられ、ないわ……若頭に金鉱の場所をお伝えするまで、なにをされたって……負けないんだからッ！）

自らに使命を課して、ひび割れていく心を懸命に繋ぎ止める。
「どうした、ンン？　歌わねぇのか？　しょうがねぇなあ」
カエル顔の小男は、言葉とはうらはらに喜色満面、あやめの太腿に手を置いて爪先立ちになった。桃尻に擦れていた男根が、粘液の滴を垂らす尖端を下に向け、唾液に濡れ光る肛門に狙いを定めて――にゅりっ！　グリリッ！
「うぅっ⁉　く……ぁああっ⁉」
熱い粘液のぬめりに乗って、怖いくらいに太い肉棒が尻の穴に潜り込んできた。
反射的に締まろうとした括約筋が、ヌルヌル滑る円錐形の塊にこじ開けられる。
さらに太く、さらに硬い淫茎が、性感帯と化した菊膜にズ、ズ、ズズズッ！
（は、は、入って……くるぅうっ！　こんな、太い……こんな、熱い……ああ、ああああ、奥に、奥まで……ああ、ああ、ああああっ‼）
腹の中に膨れあがる、誤魔化しようのない異物感。
尻の真ン中から逆さになった背へ、あるいはハの字に開いた太腿へ、じわりじわりと染み広がる心地よい痺れ。
胡座縛りに緊縛された身体が震え、撓められた背筋がくねった。
汚らわしい排泄器官を犯された、気味の悪い小男とひとつに繋がってしまった――恥辱の感情も湧き上がる肛悦に蕩け、長続きしない。

「ふは……は、く、うぅンッ！」
わななく唇から仔犬のような媚声が漏れる。
歪んだ眉根がふわっと開き、瞼の下で円らな瞳が淫らに潤む。
（やだ、そんな……どうしてっ⁉　お、お尻、なのにぃ……汚い、の、にぃ……ッ！）
感じてしまう自分が恥ずかしい。
悦んでしまう身体が情けない。
だが、しかし――。
「ン、ぷ……ふぅっ⁉　ンぁ、ン、ンぅぅ……」
肉疣を生やした岩男の逸物に揉みまくられていた顔にまで、淫らな悦びが閃き始めた。
コリコリした疣の感触が柔らかな瞼に気持ちよく、引っかけられた鼻の縁や捲り返された唇がもっと強い刺激を求め始めてしまう。
「ケケッ！　これが最後だ、あやめぇ！」
紅くヌラヌラ光る淫棒を若いくノ一の尻穴に根元までねじ込んだ仁平が、仰向いた尻に腰を乗せるような恰好で笑った。
「秘伝書の在り処を吐いちまいな。イヤだってンなら、ケツの穴がユルユルになるまで愉しませてもらうぜ？」
「か、勝手に、すれば、いい……こ、この程度のことで……うぅっ⁉　く、ぁああっ⁉」

キュニュニュ――ニュボッ！

尻穴を埋め尽くしていた太い肉棒が引き出されていき、肛門が紅い粘膜を広げてあられもなく捲れ返った。牡肉にしごかれた直腸粘膜が、甘やかに燃える。尻穴から左右の尻房へ快感電流が走り抜け、胡座に組まれた両脚が爪先をピーンと伸ばして小刻みに震える。

「くふぅぅっ！　締まる締まる！　チンポが喰いちぎられそうだ。やっぱり生娘のケツの穴はたまんねぇなあ！」

あやめの太腿に両手をつき、爪先立ちになる仁平。長い淫棒は亀頭を尻穴に埋めたまま、ぬめり光る肉棹に青筋を浮かべてしばし待機。

伸び上がった小男に代わり、褌を縄で吊り上げていた重蔵があやめの顔を覗き込む。

「強情を張るな、あやめ。いまならまだ間に合うぞ。いくら鍛えたくノ一でも、身体はひとつしかないんだ。大切にしろよ」

「む、無駄、よ……なにをされたって、私、は……負け、ないッ！」

「……そうか」

「ふぁっ⁉　く、あ……ぁあああっ！」

ぬ、ぷ……りゅりゅりゅりゅりゅッ！

常の狭さに戻りかけていた直腸が、再び熱い肉棒に刺し貫かれた。

カリ首のハッキリしない亀頭は先ほどより深くまで潜り込んできて、粘膜隔壁越しに子

宮がグリッと突き揺すられる。
「はぅぅン――――ッ!?」
腹の奥底に爆発する、熱い感覚。
子を宿すためのその肉室は、牝の快楽中枢なのだ。
「ケケケッ！　負けないんだとよぉ、岩男！」
小麦色に輝く瑞々しい太腿を両手で押さえた小男が、上下に跳ねて真っ赤な淫棒を激しく抜き差ししつつ、あやめの顔に男根を乗せた大男に笑いかけた。
「おう、聞いたぞ、聞いたぞ！　オラッ、これでも負けないのか？　ああン!?」
「ンぷっ!?　ぷは……ンぉむッ!?」
岩男の巨根が、あやめの唇を襲う。
真っ赤な亀頭で口をこじ開け、潜り込もうとする。
（い、いや……いや、いやぁあっ！）
汚い、怖い、臭い、痛い――閃く負の感情は、遠雷の稲光のように一瞬で消えた。
にゅぼっちゅ、きゅぼっちゅ、と犯されている尻穴が熱い。
妖しい粘液にぬめる牡肉が出入りするたび捲れ返った肛門が甘く痺れ、硬い亀頭にしごかれた直腸がどうしようもなく蕩けていく。
「ンぅぅ、ンぅぅぅ……ッ！」

疣々巨根に揉まれた頬も、赤ん坊の拳のような肉塊を擦りつけられている唇も、気持ちよくなり始めた。生臭い牡肉のたくましい弾力を予感して、舌がそわそわしてしまう。コリコリ硬い肉疣を想い、口の中に唾液が溢れてくる。

認めたくはない、淫毒のせいだと思いたい――だが、

（お、美味し、そう……）

微かに漂う精臭に、胸が高鳴っていた。

ズズン、ズズン、と犯されている尻穴の痺悦が、口唇にまで染み渡ってきたらしい。

粘液にぬめる男根を、気持ち悪いとは思えない。

黒光りする淫茎、びっしり生えた無数の肉疣――咥えたい、と唇が疼く。突いて欲しい、と喉が焦れる。

（ダメ……ダメッ！　汚いのよ、おぞましいのよッ！）

飢える女体に言い聞かせ、必死に奥歯を噛み締めていないと、勝手に口が開いてしまいそうだ――と。

「うぅっ⁉　く……ふぁっ⁉　じゅ、重蔵……さぁあンッ！」

難しい顔をした重蔵の手が、あやめの股間へ伸びた。縄で吊り上げた褌の下に武骨な指が潜り込み、

「や、だめ……ぁあンッ！」

クニ、クニニッ！
密かに痼り勃っていた淫核を、硬い指先に撫でられる。
「うぅぅ、ぁあ……ひぃいいっ⁉　ああダメダメダメ、それダメ、そこ、ダメぇえっ！」
逆さに撓められた身体をビクンビクンと痙攣させて、よがり悶えるあやめ。
褌の股布に染みて秘裂を濡らしていた淫毒のせいか、それとも尻穴をくぼちゅくぼちゅと犯されているせいか――。
（か、感じ、ちゃうぅうっ！　ダメなのに、イヤなのにいいいいっ‼）
重蔵の指先がわずかに動くたび、逆さになった背筋を快感の津波が駆け抜ける。
マングリ返しにされて尻穴を貫かれた身体が雷に打たれたように激しく跳ね、真っ赤に火照った顔がむずがる幼子のようにイヤイヤと左右に揺れる。
「くぅうっ⁉　け、ケツの穴が、キュンキュン、しやがるっ！」
跳ね躍るあやめの尻にのしかかった仁平が、悦びに顔を歪めて長い舌を垂らした。蛇のようにくねるソレはヌルン！　と唾液の滴を飛ばし、
「ふぁっ⁉　う、ぁああっ！」
重蔵が弄っている肉豆の傍、愛蜜を滲ませてヒクンヒクンと喘いでいた膣穴へ。
「チッと早いが、褒美をくれてやろう！」
――ぴちょっ！　ぬちゃっ！

「ひッ⁉　ぷは……ンぁあああっ！」
せせるように舐められた壺口から処女膣洞へ、熱い電流が駆け抜けた。
淫核に弾ける悦びと繰り返される肛悦が入り混じり、悦びの津波となって背を貫く。
（へ、ヘン……私、ヘンッ！　イヤなのに、気持ち悪いのに……き、もち……イイッ！）
仁平の男根が尻穴に突き込まれるたび、頭の中が白く痺れた。
ピチョペチャと穿るように舐められた膣穴が燃えるように熱くなり、男を知らぬ粘膜襞がワケも分からぬまま奮い勃つ。
しごかれた淫核には稲光が炸裂。
喘ぐ唇に硬い疣々を擦りつけられれば、口の中に唾液が溢れる。
「ダメ、イヤ……う、うう、浮くぅうっ！」
逆さに撓められた身体に行き渡る、甘く痺れる肛門快悦。
舐められた膣口と責められた肉豆に意識が蕩け、自分がどんな恰好になっているのか、どこでだれになにをされているのかも分からなくなってきた。
「はぅ、はぅン……にゃぅうンッ！」
上下する亀頭に突き揺さぶられ、肉芯が燃える。
胸が高鳴り頭が麻痺して、脇や耳裏に甘酸っぱく香る汗が滲む。
「やぅ、ぁあ、らぁぁ、ぇえぇっ！」

なにを叫んでいるのか、自分でも分からない。
舌が縺れ、鼻にかかった甘え声になるのに、それを恥じる余裕もない。
ただグポグポと尻穴を突かれるまま、弾ける肛悦によがり悶えて、
「浮く、浮く浮く……ああ、飛ぶ、飛ぶ飛ぶ、飛んじゃ、ぁあぁあ、うぅぅぅっ！」
絶頂への坂道を一気に駆け上っていく。
「まだイくな、イッたら承知しねぇぞッ！」
扁平な顔を真っ赤に染めた仁平が獣のように笑い、荒々しい突き込みを早めた。
にゅぽぽっ！　と抜け出ていく淫棒に吊り上げられるように、逆さになったあやめの尻がさらに高く、跳ねるように宙に浮く。
「しょ、しょん、にゃぁあぁ……ぁあっ⁉　ら、らめらめ、らぁあぁあ、めぇぇぇッ！」
トトトトトトト――重蔵の指先に、小刻みに責め立てられる勃起淫核。
悦びの激流が撓められた背を駆け抜け、あやめの脳髄を掻き回した。
「にゃひぃ、ひ、ひぃいっ！」
溢れる春声、捩れる身体。
閃く快感に打ち抜かれるままビクンビクンと痙攣し、眩い光が充ち満ちる遙かな天界へ矢のように飛翔していき――。
「うぅぅ、ぁあああッ⁉　にゃひぃいっ！　イィィ、イくぅぅぅッ！　イくイく、イッち

やうイッちゃう、イィィィッちゃぁあああ、うぅぅぅ――――――ッ!!」
――ビクンッ！　ビククンッ！
胡座縛りに緊縛された身体が、喰い込む縄を軋ませて鋭く捻れた。
小麦色に日焼けした瑞々しい太腿に、パァッと広がる恍惚の朱。
男根を咥え込んだ尻穴が緊縮し、亀頭や肉棹に絡みついた直腸粘膜がたくましい弾力を揉むように搾り――ぷしゅっ！
ピュルルッ！　プッシャァアア――！
縄に中央を吊られて浮き上がった褌に向けて、黄金色の小水が勢いよく迸った。
仰向いた胸に、絶頂に放心したあやめの顔に、生臭い滴が音を立てて降り注ぐ。
汚い――とは、思わなかった。
（い、いまのが……イ、く……）
生まれて初めて体験した、至高の瞬間。
甘く気怠く心地よい余韻に身体も心も痺れてしまい、もはやなにも考えられない。
「ケケ、まだガキだな。小便を漏らしやがった」
笑った仁平が、あやめの太腿を押して淫棒を引き抜いていく。
射精しなかったのか、それはとても硬く、太く、熱くて――。
「ふ……く、ンぅっ！」

すっかり見慣れてしまった、重蔵の逸物。

なんという色艶、なんという厳めしい姿――赤々と輝く亀頭はクサビ型、切れそうなほどクッキリとエラを張り出し、凛々しく反り返っている。

見るからに硬そうな、重そうな、偉容。

涙に潤んだ瞳を上目遣いに、裏筋に走る糸が縒れたような筋を辿り降りれば、鶉の卵ほどの珠をふたつ納めた陰嚢も見えた。

が、しかし相変わらず、男そのものは見えない。

「違う、違う……違うッ！　こ、これは……生き傀儡の術の、せいよ！」

なんていやらしい術だろう、汚らわしい肉棒しか見えなくするだなんて――思いながら、あやめは気づくと両手を筵につき、はぁ、はぁ、と上擦った息をこぼしながら四つん這いになっていた。

額の高さにあったはずの淫棒が、鼻先に揺れている。

真っ赤に輝く牡肉があまりにも美味しそうに見えて――思わず鼻を寄せ、犬のようにスンスンと嗅いでしまう。

「いやらしいな、あやめ。そんなことをしてもまだ、俺のせいだと言い張るつもりか？」

「そ、そう……これも、術の、せい……でなければ、こんな、こんな……あッ!?」

涎を垂らす口が勝手に開き、亀頭を咥え込もうとした。

えっちシーン試し読みスタート！

イヤだダメだ、それはイケナイ――あやめの理性が悲鳴を上げるより先に、精臭を放つ肉塊はからかうようにスイッと逃げる。
「うぅっ⁉　ふぁ……うぅッ⁉」
焦れた唇が、思わず追いかけてしまった。
今度こそ咥えられると思ったのに、またしてもスイッ！
（ど、どうして……どうしてっ⁉）
口を犯すつもりではないのか？
喉奥までグポグポ突くのではないのか？
（お、犯すなら、犯しなさいよッ！）
生き傀儡の術に操られているのなら仕方ない、あやめ自身の意思では抗うことすらできない――ならば犯せというのは乱暴だが、ひとり遊びで昂っていた牝の身体にもはや理屈は通じない。
喘ぐ唇が焦れる。
愛液のような涎が口端に垂れ、牡肉を求めて伸び出した舌が何度も何度も虚空を舐める。
「ふぅぅ、うぅぅ……意地悪ぅう、意地悪ぅうっ！」
あまりの焦れったさに、涙が溢れてきた。弛んだ短衣の胸元では小振りな美乳がはしたなく火照り、痛いほどに張って、裏地に擦れた乳首に甘い痺れが何度も閃く。

「ケケッ！　悪いヤツだな重蔵は。可愛いあやめが、おチンポしゃぶらせてくださいって泣いているじゃないか」
「あぅッ⁉　や、ぁああっ⁉」
四つん這いになった身体の下に、なにかが潜り込んでくる気配。
姿は見えないが、カエル顔の小男が仰向けになり、あやめの下に滑り込んだらしい。
「ふぁ……う、っくぅぅっ⁉　や、やめ、ろぉおっ！」
短衣の襟がはだけられ、未成熟な乳果が冷たい空気に撫でられた。日焼けしていない真っ白な柔肌が、湧き上がる快感に焦らされてたちまち艶めかしい桃色に染まる。
「お？　貧弱な乳なのに、一丁前に張ってやがるな。ケケケッ！」
「くっ⁉　あ、うぅうっ！」
むぎゅ、むぎゅぅぅ！
下から貼りついてきた粘つく手指に、左右の火照った乳肉が揉み歪められた。舌のように生温かく濡れた感触が、焦れていた乳肌に気持ちイイ。芋虫のように蠢く指で乳芯まで揉み込まれると、胸に甘やかなモノが溢れ――。
「ふぁ……く、ぅぅンッ！」
思わず仔犬のような声が漏れ、うしろに突き出した尻がクゥッと仰向く。
「そろそろ種明かしをしてやりなよ、重蔵」

胸の下で笑った見えない男が、舌を伸ばしてきた。
「ふひっ⁉　ひぁ……うぅっ！　やだ、ダメ……舐めちゃ……いやぁあ！」
チロチロせせられた乳首に快感が閃く。
舐められている肉豆は痺れるくらいに気持ちよくなり――待たされている肉豆は、器用な舌を欲して痛いほど痼る。
「うぅ、うぅ……あぅっ⁉」
呻くあやめの頬に、グリッと擦れる重蔵の逸物。
今度こそ――と慌てて口を開いたのに、意地悪な亀頭は迫る唇を掠めてまたしても逃げ、額に軽く擦れつつ反対側へ。
「生き傀儡の術は、確かにかけた。だが、それは男が見えなくなるツボを突くためだ」
「そ、そんな……ふぁ、うぅ、ンッ！　し、信じられ、ない……ぁうッ！」
見えない手に乳房を揉まれ、乳首をチロチロ舐められつつ、必死に首を捻って男根を追いかけるあやめ。
頬や瞼に生臭い先走り汁を擦り込まれた。
顎の下を潜る牡肉に喉をくすぐられ、あるいは額を掠める亀頭に前髪を梳かれる。
――なのに、どうしても咥えられない。
（どうして、どうして……どうしてそんなに、意地悪、なのぉっ⁉）

野苺のような唇がますます焦れて、細い顎を伝った涎が長い糸を引いてユラユラ揺れる。真っ赤に染まった頬には涙が流れ、上擦る息が抑えられない。

「そうしておけば、お前がココを逃げ出した場合でも若頭を見つけられないからな。しかしコレは難しい術だ。淫欲を掻き立てる術とは併用できん」

鋼のように硬い淫棒をあやめの顔に擦りつけつつ、重蔵が低い声で言う。

「う……？　う、ウソ……そんなの、ウソよ！」

「本当だ。女琴の術を解いたお前がひとり遊びを始めたのは、ただ単に、お前が淫女に堕ちていたというだけのこと。まさかと思って男根を出してみたら、どうもコレだけは見えるらしい――ということは、だ」

「ツボの効能を打ち消すほど、チンポを欲しがっているわけだ。グフフ！」

背後から岩男の声が降ってきて、

「うっ⁉　あ……ああっ！」

大きな手に尻を掴まれ、肛門に熱いモノを押しつけられた。

この大きさ、この硬さ――振り返らなくても分かる。岩男の疣つき巨根だ。

「い、いや……いやいや、やめてぇえっ！」

「グフ？　イヤなのか？　その割に、お前のケツの穴ぁ、弛んできたぞ」

「うぅっ⁉　う、ウソ……ウソウソ、そんなハズは……ぁああ！」

意識を尻穴に向けたあやめは、気づく。
焦れに焦れていた肛門がたくましい牡肉の感触を悦び、勝手に弛緩してポッカリ口を開けてしまったことに。
「俺たちがしたこととはいえ、哀しいなあ、あやめ」
頭上から重蔵の声が聞こえ――頭をグリグリ撫でられた。
（あ……）
まるで子供のころのようだ。
涙に濡れた瞳を上目遣いにすると、ほんの一瞬、哀しげに微笑んだ重蔵の姿が見えたような気がした。
「男そのものは見えなくても、男根だけは見える――それはお前が、オチンチンを心の底から欲しい欲しいと願っている証だ」
「ち、ちが……ちがう……ちがう……」
「ほかの術などかけていないのに、自由を得た途端、指遊びを始めた。お前の意識は別として、身体はもう、男根なしではいられないんだよ。それはつまり、淫欲が満たされない限り逃げ出せなくなったということ――」
「ちがう、もん……ちがうもんっ！」
意識が退行していく。言葉遣いが幼くなる。

あやめの頭を優しい手つきで撫でて、重蔵が低い声を続ける。
「放っておいてもよかったのだが、お前の鳴き声があまりにも不憫でなあ……遊んでやるよ、あやめ。そぅら、お前の大好きなオチンチンだぞ」
「ンぷっ⁉　ンぁ……あはぁ……！」
赤々と輝く亀頭を唇に擦りつけられたあやめは、途端、蕩けた笑みを浮かべた。
待ち焦がれていたモノ。
欲していたのに与えられなかった、愛おしいモノ。
込み上げてくる欲望に操られるまま口を開き、生臭い肉棒を――アモッ！
（あ……バカッ！　なにしてるの、私ったら……！）
わずかに残った理性が、ほんの一瞬閃いたが――。
舌や唇に感じる男根の硬さ、大きさ、重さ、熱さ。
身体が芯から熱くなり、小麦色の柔肌に甘酸っぱく香る汗がブワッと噴き出す。
コレ――コレだ。
コレが欲しかったのだ――！
「む……ちゅ！　むっちゅぅぅぅうっ‼」
唇を窄めて肉茎を締め、口一杯に頬張った淫棒を夢中で吸い立ててしまう。
四つん這いになった細い身体が、ブルッと震えた。

仁平に舐められていた乳首が一段と勃起し、割れ目の縁では淫核が痼る。
（うぅ、あは……あはは。お、おい、しい……オチンチン、美味しい！）
――ちゅばっ！　むちゅっ！　じゅちゅるっ！
柔らかな頬が凹むほど強く吸い立て、甘辛い牡の味にうっとり目を細めるあやめ。
重蔵の言う通りだ、術のせいなどではない――悔しいが、認めるしかない。
確かにこれは、生き傀儡の術ではない。
肉の悦びを教え込まれた若い牝の身体が、たくましい牡を求め、欲して、おかしくなるほど焦れていたのだ。
認めた途端、フッと心が楽になった。
恥ずかしい気持ちはまだあるが、重蔵が頭を撫でてくれているのは、恥ずかしがらなくていいんだよ、という意味だろうか？
「ふぇ、ふぇふぇお……？」
いいの、と訊いたつもりだが、太い男根をぱっくりと頬張ったままなので、ヘンな声になってしまった。
しかし優しい重蔵は低い声で、
「ああ、いいんだよ」
あやめの欲望を許してくれた。

「ンは……は！　あはは！」
あまりの嬉しさに、身体がまた、ブルルッと震える。
もういいんだ、恥ずかしがる必要はないのだ。
重蔵兄ちゃんが許してくれた、もう我慢しなくてもいいんだ――。
淫欲が解き放たれ、一気に膨れあがる。
（オチンチン、オチンチン……重蔵兄ちゃんの、おちんち、ンぅうっ！）
じゅちゅっ！　じゅちゅっ！　じゅっちゅぅうっ！
唇に感じるゴツゴツした淫茎、舌を圧し潰す重み、上顎の粘膜に擦れている亀頭――そのすべてに悦びを感じ、あやめは嬉しそうにしゃぶり立てる。
「グフフ……なんてぇいやらしい咥えっぷりだ。俺も遊んでやろう」
「ンむっ⁉　ンぷぁ……ンふぅ……！」
グリ、グリ、グリリ――うしろへ突き出した尻の真ン中、いやらしく弛んで腸液を垂らしていた肛門に、熱い塊が押しつけられた。
（お、お尻にも……お、お、おちん、ち……ンぅうっ！）
たくましい弾力を予感して、直腸が焦れる。
四つん這いになった身体が、肛悦を期待してしなやかにくねる。
なのに、赤ん坊の握り拳ほどもある亀頭は菊膜をしごいているだけで、なかなか入って

こようとしない。
頬に擦れていながらなかなか口を犯してくれなかった重蔵の肉棒と同じだ。肉の悦びをちらつかせつつ、淫女に堕ちたあやめを焦らしに焦らす。
（うぅ、ぁあ……イヤ、イヤ……もうヤダ、意地悪、しないでぇえっ！）
待ちきれなくなったあやめは、自ら身体をうしろへずらした。
ぐ――ぐぽぽっ！
「ンぇはっ！」
巨根の切っ先がようやく尻穴に嵌まる。
あまりの太さに菊膜が伸びきり、甘い痺れが左右の尻房へじわりじわりと染み広がる。
（い、い……いぃぃッ！）
この太さ、この硬さ、この熱さ――牡に犯してもらえたという本能的な悦びも加わって、頭の中が真っ白になるくらい気持ちイイ。さらに尻を押し出していくと、
――コリッ！　コリッ！
色を失うほど伸びきった菊膜が淫茎に生えた硬い疣々に弾かれ揉まれ、痺れるような肛悦が何度も何度も炸裂する。
「むぷぁ、ふぁ、ふぁ……」
涙に濡れた瞳が妖しく笑み、犬のように這った身体が小刻みに震えた。

巨根を呑み込んだ排泄器官が燃えているように熱い。
心地よい火照りは尻房だけでなく、背にも胸にも染み渡ってきた。
耳の裏や腋下に甘酸っぱい汗が滲む。背筋を伝う肛悦に頭の芯まで痺れてしまったのか、手足の感覚が薄れていく。
（お尻、イイ、イィ……イイよぉぉ……！）
太くて硬い淫棒を半ばまで咥え込んだ尻穴が、無数の疣々に揉み込まれ、グリグリ抉られ、涙が溢れてくるくらい気持ちイイ――のだが。
その代わりに口の中の淫棒は半分以上抜け出てしまった。
舌に重みを感じない。
味蕾に牡の味が染みてこない。
口の中に残っているのは、唇にエラを引っかけた亀頭だけ。
排泄器官の欲望が満たされた分、今度は口唇がもどかしくなる。
「ンちゅ、むちゅ……ちゅぅぅっ！」
窄めた唇を牡肉に貼りつけ、はしたない音を立てて吸ってみるが、物足りない。
自由に動く舌で鈴口を穿るように舐めたり、舌の裏側のヌルヌルした部分を硬い肉塊に擦りつけてみたりしたが、それでもやはり物足りない。
（うぅ、うぅぅ……お口にも、おちんち、ンぅぅっ！）

切なさに衝き動かされ、あやめは前へと動いた。
ヌ、ヌヌヌッ！
舌の上にずっしりとした重みが戻ってくる。
その代わりに――ぬぽ、ぬぽぽ、グぽっ！
今度は尻穴を捲り返して、疣々を生やした肉茎が抜け出ていく。
「ンぇぁあ……んぇあ、あもっ！　ンちゅっ！」
思い通りにならない焦れったさに涙をこぼしつつ、あやめは身体を前後させ始めた。
じゅる、じゅちゅ、と吸い立てている淫棒が口から抜けていけば、尻穴が熱くて太い淫棒に深々と抉られる。
抜け出ていく肉疣巨根の感触にうっとりしながら身を乗り出せば、今度は生臭い亀頭が舌を圧し潰し、咽喉蓋をグポッと抉る。
「ケケケ、いやらしいガキだなあ」
胸の下で仁平が笑い、乳房がムギュッ、ムギュッ、と揉まれた。
「もぷっ⁉　むぁ……むぁはぁぁぁ……！」
湧き上がる肉悦に目を細めたあやめは、重蔵の男根を嬉しそうにしゃぶり、尻穴をキュッキュッと締めて岩男の巨根を悦ばせようとする。
しばらくの間、交互に閃く肛悦と口悦、揉まれた乳肉に湧き上がる温かな快感に満足し

ていたあやめだが――そのうちに、再び物足りなくなってきた。
（な……なんれ？　ろうして⁉　こんなにいっしょうけんめいおしゃぶりしているのに、おっぱいモミモミされて、おまめをチロチロされて……ウンチのあなも、ぐぽぽぐぽぽ、されて、いる……のにぃぃいっ‼）
細い身体を前後させ、汗と涎、涙と鼻水を垂らして、口や尻穴や乳房に閃く悦びを必死に追い求めるあやめ。
どんなに激しく動いても満足できないのは、膣が満たされていないからだ。
本当に感じる場所が、たくましい弾力を求めて飢えているからだ。
「あんまり焦らすな、仁平。あやめが壊れてしまう」
「ケケケ！　重蔵がそう言うならしょうがねえ、そろそろ挿入れてやるか」
もったいつけた仁平が、クイッと腰を動かす。
その様子は相変わらず、あやめの目には映らないのだが――。
「むぉっ⁉　ンぷ……ンぇあっ！」
焦燥の涙が、一瞬で法悦の涙に変わった。
蛇のようにくねる異様な肉棒があやめの淫唇を掻き分け、愛蜜を噴きこぼして喘ぐ膣穴に真っ赤な亀頭をグプチュッ！　と突き込んだのだ。
「ケッ⁉　尻の穴に岩男のが入っているからか、ずいぶん狭いな」

苦笑した仁平が、眉間に皺を寄せて下腹に力を込める。
――ぐちゅ、ぐり、ぐぶちゅっ！
細いが硬い淫棒が、裏側から圧されて狭まっていた膣穴を強引にこじ開けて突き進む。
「ンぇ、ンぁ……ンぇあああっ！」
繊細な粘膜隔壁がコリコリ硬い疣々としなやかで熱い弾力に挟まれ、揉み潰されて、稲光のような淫悦が次々と炸裂。
（コレ……コレ、コレコレコレぇぇぇっ！）
膣穴から背筋を伝って脳天へ突き抜けていく、熱い津波。
待ち焦がれていたのはコレだ。手足の先まで痺れてしまう、この快感だ。
本当の肉悦をようやく感じられたあやめは、それだけで舞い上がってしまった。
「ンぁもっ！　ンちゅっ！」
重蔵の男根を咥え直し、硬い淫茎に舌をぬっちょり絡めて、夢中で吸い立てる。
そのまま身体を前後に揺さぶり、鋼のように硬い疣々巨根にぐぷちゅ！　ぐぼちゅ！と尻穴を掻き回させる。
「お？　腰を振らなくてもいいのか。ケケ、こりゃ楽チンだ！」
あやめの乳房を揉み込み、真っ赤な乳首をしゃぶったり舐めたりしながら、仁平が嬉しそうに笑った。その、異様に長く伸びた男根は、緩い弧を描いてただ強張っているだけな

のだが――。
ぐぽちゅっ！　ぬぼちゅッ！
あやめが身体を揺らしているから、勝手に膣穴を抉っている。
紅玉のように硬くツルツルとした亀頭は熱いヒダヒダにしゃぶられつつ、なにをしていなくても勝手に奥へ奥へと突き進んでいく。
そして、それ以上に――。
（あ、あは……あははっ！　オマ〇コ、キュン、キュン、してるぅうっ！）
牡を悦ばせようとした膣穴が長い肉棹に絡みつき、拍子をつけてしゃぶっていた。
奥へ進むときに弛み、抜け出ようとしたときに絞る。
結果、ドングリのような形をした肉塊は、淫穴の奥へ吸い込まれていく。
「ンぇあ、ンぉぷ、ンぇ、ン、ン……むぷはっ!?」
ズンッ！　ズズンッ！　ズズンッ！
自ら腰を振っているあやめの奥底に、一際熱い肉悦が爆発し始めた。
仁平の淫棒がとうとう膣奥に達し、子宮口を抉り始めたのだ。
「ン、ン、んぅぅぅ――ぷぇはっ！　いふぃ、いふぃ、いふぃいいいっ！」
膣奥に刻み込まれた衝撃が、子宮で増幅されて胎内に響く。
弾ける快感に反応し、尻穴がキュウッと窄まって、直腸を抉っている肉疣巨根をよりハ

ッキリと感じられるようになる。
（いぃ、いぃ、いぃぃ！　オマ〇コ、イィ……お尻、いぃいっ！）
気持ちイイのは膣や尻穴だけではない。
ムギュリムギュリと揉み潰されている乳房は蕩けそうだし、チュパチュパしゃぶられレロレロ舐められている乳首は甘く痺れきっている。
「ンんぅぅぅ……むちゅっ！　ちゅぱっ！」
肉茎に絡みついた唇も、イイ。
重い淫棒に圧し潰されている舌にも、熱い亀頭にグポッグポッと抉られている咽喉蓋にも、電撃のような肉悦が次々と炸裂している。
「させているだけでは悪いな。どれ、動いてやるか」
「ふぁ？　あ……あぇおっ！」
重蔵の声が聞こえ、見えない手に頭を掴まれた。
尻に乗っていた岩男の手ももぞりと動き、細い腰が抱え直される。
（く、来る……⁉　してくれ、るっ⁉）
淫悦の予感に、蕩けた笑みを浮かべるあやめ。
涎に濡れた顎を上げ、細い喉をクウッと伸ばすと――。
ぬぐぽっ！　ゴキュキュキュッ！

荒々しく突き込まれた淫棒が、あやめの喉を深々と抉る。
ぐぷちゅちゅちゅっ！　ぐぷちゅちゅちゅ！
尻に取りついた岩男も、腰を力強く打ちつけてきた。無数に生えた肉疣に性感帯と化した菊膜が弾かれ捲られ、揉み潰されて押し戻される。
「えぉっ！　えぉ、えぇおぉおっ！」
喉が悦び、直腸が燃えた。
刻み込まれる快美感に追い立てられているように、あやめ自身も激しく腰を振る。
「ケ、ケケケッ！　俺様も、負けちゃいられねぇなっ！」
仰向けになった仁平が、器用に腰を突き上げ始めた。
ぐぬちゅっ！　じゅくちゅっ！
子宮口を小刻みに抉る、カリ首のハッキリとしない細身の亀頭。
「ぇあっ⁉　ンちゅ、ちゅちゅ……んぇぁああっ！」
胎内のもっとも深い部分に刻み込まれた快感が、肉の悦びを加速しているのか。尻穴がどんどん気持ちよくなる。重蔵の逸物に抉られた喉は蕩けそうだし、仁平に揉み潰されている双球は燃え出しそうなくらい火照る。
「むちゅっ！　むはっ！　ンじゅちゅっちゅぅぅ！」
肉悦に命じられるまま男根をしゃぶり、尻穴を締めて巨根を悦ばせるあやめ。

「グフフゥ⁉　こ、コイツ……なかなか……グフッフゥウッ！」
「喉も、くぅぅ……おお、イイ、イイぞっ！」
熱い粘膜に淫棒を絞られた男たちが頬を赤らめて嬉しそうに呻き、腰の動きを速めた。
ぬぼちゅっ！　ぐぼちゅっ！　くぼぼっ！
無数の疣々に捲り返され、腸液を噴きこぼす尻穴。
抜き差しされる淫茎に絡みついた唇からは、細かく泡立った唾液がいやらしい音を立てて溢れ出す。
「ンぅぅ……ンぷぁあっ！　いふぃ、いふぃ、いふぃぃぃぃぃっ！」
法悦の涙をこぼし、鼻水を垂らして、若いくノ一は淫らによがり狂う。
しなやかな背が、泳ぐようにくねる。
「むっちょ、むっちゅ……ちゅぱ、むちゅっ！」
うしろへ突き出した尻をカクンカクンと振る。
牡肉にむしゃぶりついた口から涎を垂らして、激しく前後。
（イィ、イィ……イィイッ！）
動けば動くほど気持ちよくなる。
どんどん堕ちていく。
くノ一ではなく牝獣になっていく。

それでもいい――まったく問題ない。
（らって……らってらってらってぇえ！　こんなにきもふぃイイんら……もンぅっ！）
蕩けた頭で幼稚に悦び、仰向いた仁平の掌に自ら乳房を擦りつけるあやめ。
口唇、胸乳、膣穴、尻穴――身体のあちこちに刻み込まれる肉の悦びに喘ぎつつ、遙かな頂へ向けて風のように駆け上り――。
「ン、ぁ……ぷぇはっ！　ぇあ、ぇあ、ぇあああっ！　イイ、イイ、イイよぉおっ！」
真っ赤に茹った男根を吐き出して叫んだ瞬間、最後の一線を飛び越えた。
「はにぇぁっ⁉　ぇあ、ぇあ、ぇあああっ！　オマ〇コ、おしり……ィィイッ！　イイ、イイ、イィイくイくイく、イくウッ！　イィイイイッ、くぅう――――ッッッ‼」
――ビクンッ！　ビククンッ！
雷に打たれたように、鋭く反り返るあやめ。
それだけでも頭の中が真っ白になるほど気持ちよかったのだが――。
――ぬぐちゅっ‼
「にゃぇああっ⁉　あひ⁉　あひぃっ⁉　あ、あ、あ、あぇひぃぃ――――――ッ‼」
さらなる激感に打ち抜かれ、あやめは腕を突っ張って竿立ちになった。
異様に長い仁平の男根、カリ首のハッキリとしない肉クサビが、狭い子宮頸管を貫いて子室の中まで突き抜けたのだ。

（なにコレ、なにコレ……ああ、ああ、あああ……し、びれ……るぅぅ……ッ！）
爪先指先はもちろん、髪の先まで駆け抜けていく、凄絶な快美感。
ビンビンする。
ゾクゾクする。
しかも過ぎ去ることなく、延々と続く。
「ぁへ、えへへ……あぇぁぁああ……」
涙と涎をこぼし、鼻水までを垂らして、あやめはビクンビクンと痙攣しながら恍惚の笑みを浮かべる。
その、淫らに呆けた顔に――ギュウッと締まる尻穴の奥や子を宿すための肉室にも、
――ビュクッ！　ビュパッ！　びゅるるっ！
ドピュッ！　ピュピュッ！　ドプドプドプッ！
溶岩のように煮え滾る白濁液が、勢いよく浴びせかけられた。

＊　＊　＊

男根しか見えぬ淫女に堕ちて、何日経っただろう――。
「――め、あやめ！」
「ッ⁉」
夜、暗闇の中。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/